

空



2015・10

SORA 63号

阿蘇

柴田佐知子

日かげれば山河が古ぶ盆の入り

一人来て増ゆる一燈秋気澄む

雲うすく広がつてくる桃を挽ぐ

小鳥来て枝の震へてゐるところ

色鳥の疲れを知らぬ真昼かな

寝ころんでみるには痛き花野かな

馬のあと牛に食まるる大花野

阿蘇原の起伏あらはに月渡る

相愛の時は流れて真葛原

休日の縁より仰ぐ木守柿

軒下も帰燕の空となりけり

仏間の燈厨の火雁渡りけり

健やかに老いて茸の山に入る

葛の香や牛馬沈めし阿蘇の闇

澄む水の外輪山を出でゆけり

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

雲ひとつ入る隙なき青田かな

水よりも草にさざなみ流燈会

人間の口開いてのみ大花火

青春の短き亡母に秋の薔薇

おほかたは諦めてゐる麦酒かな

流れ星地球とび出したくなりし

峰雲の棒立ちとなる筑後川

牛に径どいて貰ひて案山子来る

裏返す石に湿りや原爆忌

ひぐらしに追ひつめられし水のいろ

夕立の山を半分隠しけり

ぎりぎりの飛沫の白さ月のぼる

ごり押し政治家ばかり油照り

月の楠古巢は嬰の帽子ほど

昼寝覚母の亡き世と思ひけり

灯火親し画廊となりし酒の蔵

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

男梅雨マリア素足で立ち尽くす

テニスコート強き斜めの片かげり

父の日の夫やシヨパンとカフェオレと

電柱を日ごと絞めゆく凌霄花

半島が半島隠し大夕焼

蜘蛛の囿や十萬億土の果てに星

水中花たれも居ぬとき息吐きぬ

月下美人鎌首あげて開かんと

胸元にちちの扇を持ち歩く

僧へ昼餉冷素麺をより冷やし

新涼やピアノの八十八鍵も

密やかに歪みゆくもの花氷

臥す姉の庭に白萩こぼれ萩

藍浴衣死装束となるもよく

折鶴の紙の千枚十三夜

底紅や麻酔覚めつつある奥歯

福岡 柴田志津子

入道雲仏の山を鷲掴み

妖怪のはなしが好きな浴衣の子

落し文ひらけば去り状かも知れぬ

秋立つや牛が寝そべる草千里

誰も居ぬ部屋も灯して盃蘭盆会

納得のゆかぬ一語や氷頭膾

駅長の手旗信号鳥渡る

人の手を借りて花野の端に立つ

福岡 だいじみどり

ひぐらしやあの世あひたき人ばかり

颱風の走れる雲へ首を出す

牛蛙耳を押へて走る子や

塵芥うめし畑の蕪の花

ねむるまへ揚羽は蜜を吸ひつくす

頬杖のあさぎまだらのことばかり

はやく植ゑてとチューリップの球根

球根へひたすら土を篩ふかな

福岡 岸 洋子

北九州 深川 淑枝

暑にこもるからだに水を足し続け

百物語篋筒閉むればどこか開き

夾竹桃いつまでも咲く「あの日」また

螢火に鬼火のまじり戸が軋む

滴りの一粒ほどの言葉欲し

八朔や鬼を呼び出す能の笛

重なりしままあめんぼう流れゆく

上げ潮に暗渠ひびけり夜の秋

空蟬の眼に氏神の泥少し

片腕つつ通すうすもの海昏るる

船の名で男呼ばるる送り盆

はまなすや藍深めたる潮の帯

耳すます法師蟬鳴き納むまで

蝶発ちし揺れにありけり花擬宝珠

阿蘇初秋岩とも紛ふ牛ごろごろ

濛々と雨の家居や実梅落つ

兵 庫 戸 栗 末 廣

香水や話だんだん怖くなる

水貝やゆふぐれの風六階に

沖からの風に磨かれ蜜柑山

猪垣の囲める山のかしこまる

落鯛の沖より月の上りけり

水移すやうに新米移しけり

桐一葉おどろきやすき魚のかげ

昼からは好きなこととして万年青の実



空集抄
柴田佐知子抽出

秋天や拳の太き反戦歌

百万年前は原人木の実降る

遠嶺晴すでに傷もつ四鮎

足も手も喜ぶ赤子天高し

大雨のあと水提げて墓参

神鏡の裏へ表へ夏の蝶

妻と吾とふるさと二つ墓参

かつて原子野赤とんぼ赤とんぼ

一山の一寺明るき盆踊

家ごとに蔵のある村早稲の秋

亀井紀子

原友子

深川淑枝

永淵恵子

天谷翔子

林徹也

小谷一夫

千波悠

山本則男

西住三恵子



道具みな数へなほして三尺寝

蹠に砂のくづるる秋つばめ

湖の波寄る鳥居夏燕

ひたすらに草取る齡忘れをる

秋澄めり消防団はかけ足で

獣医舎の柵にかけある汗のシャツ

扇風機の風のとどかぬ澱あり

じんわりと海霧包みゆくビルの街

返事せぬことが応へや秋時雨

幸せの一つに数へ栗の飯

二階より声掛けらるる祭稚児

夏潮の浸してゆきぬ歌枕

戦場のごところがれる蟬の殻

天瓜粉あらはとなりし夫の皺

吉田 蓿

戸栗末廣

石川 叔子

田坂能雄

あさなが捷

田中とし江

栗原京子

矢野百合子

田邊 豊子

中田みなみ

青木 朋子

松田 明子

秋 千晴

白水 良子

砂踏めばサ音出す砂夏の月

黒山羊より絞る白乳夏の露

夏蝶の三つ巴なる影一つ

阿蘇寝釈迦胸に湧き継ぐ夏の雲

番犬の人に懐いて豊の秋

蓼の花どれも悲しき子守唄

軒先に吊す魔除けの唐辛子

朝蟬やまだ誰も居ぬ更衣室

海からも山からも風盃蘭盆会

馬死んで残る轡や合歓は実に

大つぶの雨に夏草跳ね上がる

はかれずについておいきよ流灯会

昼の蚊の途方に暮るる奥座敷

蝉時雨ベッドに病む身貼り付きぬ

織田高暢

窪みち子

森俊人

苑実耶

小林朱夏

宮井知英

田代民子

仲里奈央

山田正子

横田敬子

山内碧

上川いつ子

押田裕見子

長末不断



塩壺に塩の塊土用明

峡の月地球の皺を渡りゆく

国さかひあひまひにして法師蟬

錆びつきし非常階段日の盛

秋田犬主引きずり来て青葉

夜の雨好きな曲かけレース編む

桃をむく考へ事は端に置き

白百合のみづから花粉もて汚る

夏の月ふり向かぬ子を見送りぬ

吹かれつつ芙蓉は眠たげにひらく

夕涛へつづくぬけ道月見草

小波の岸へ岸へと涼新た

にぎやかに子のついてくる墓参

二百十日雨にぬれたる万国旗

田岡千章

橋本知笑

野畑さゆり

井上和子

岩井京子

立花一枝

田代貞枝

えとう樹里

田口萬智子

村上二三

小川涼

遠山のり子

岡村尚子

わたなべ漣



煙草屋に江戸風鈴の真昼かな

かなぶん止まれ記す夜の句帳

大輪の向日葵眩し病み上り

玻璃盤に釣花うつる点前かな

夏潮の渦まく音の大ききよ

青葡萄学生服の三島の眼

蒲の穂を揺らす筑波嶺よりの風

お日さまが真上に来る麦藁帽

終戦日梅干し一つ塩むすび

一段づつ雲海抜けて着陸す

白桃の香りで覚むる午睡かな

薬剤師に歩けと言はれ秋の雲

蟻穴を出てこの世の騒がしき

梨むいて一人の午後の長きこと

今井春生

本多トミ

荻悠子

山口弘子

村上典子

古川夏子

田中素直

三輪敏夫

吉村撰護

清水量子

犬丸勝子

片田きく

ふじの茜

森真二